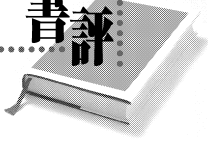


書評



野村総一郎, 中村 純, 青木省三, 朝田 隆, 水野雅文 シリーズ編集

和田 清 編

《精神科臨床エキスパート》

依存と嗜癖

どう理解し、どう対処するか

齋藤利和

依存と嗜癖については歴史的にさまざまな意味付けがなされてきた。これまではICD-10(WHO 診断基準), DSM-IV(米国精神医学会診断基準)では1977年のWHOが示したアルコール依存症候群の概念の影響を強く受け、両診断基準の中に精神依存を中心とする依存症の診断基準が示されていた。

しかし、最近出版されたDSM-5では乱用と依存とで構成されていた物質使用障害から乱用、依存の概念は消失し、乱用3項目、依存7項目の診断項目に「渴望」の項目を加えて11項目の診断項目からなる物質使用障害としてまとめられている。また大項目は“Substance-Related and Addictive Disorders”となり、ギャンブル嗜癖がそれに加えられた。インターネット嗜癖も近い将来加えられる可能性がある。これはDSM作成グループの依存から嗜癖に診断基準を修正し、物質に限らず、ギャンブルやインターネットなどの行為嗜癖を含めて、より広く診断の対象を広げたいという意向があることがうかがえる。第1部「総論」を担当している宮田、廣中直行の言葉を借りれば、「物質だけではなく、嗜癖行動を起こす対象物を広く包括し、社会的障害も疾患概念に含み、疾患の閾値を下げる(より広く診断できる)ようになったといえる。このことが、依存と嗜癖の違いになるのであろう」ということである。つまり、嗜癖概念は依存概念より広い分野を包含する、より現実的な、実践的な概念ということになる。

本書はDSM-5の登場によって依存概念から広げられたこの新しい嗜癖概念の実践的な理解に有益で

ある。すなわち、第3部「嗜癖問題への対応と考え方」では、この手の本では取り上げられることのなかった病的ギャンプリングとインターネット嗜癖に多くの部分を割いている。さらに本書では、この第3部を含め、第2部「アルコール・薬物依存症の問題への対応と考え方」から第4部「回復支援施設からみた依存・嗜癖」に至るまできわめて実践的な姿勢で貫かれていることは注目に値する。またその内容も初心者からベテランに至るまでを満足させるような幅広い内容となっている。すなわち、第2部を例に取れば第1章の「臨床家が知っておきたい依存症治療の基本とコツ」(成瀬暢也)では治療にとって必要なことが漏れなく書かれているだけでなく、著者の長年の経験から生まれた、秘伝のコツまでもが書かれている。そのほか、併存する精神病的障害、暴力、自殺、家族支援に至るまで、これまで現場で苦闘をしてきた専門家の得難い助言が満載である。従来の依存概念から、より広い嗜癖概念へとかじを切ったDSM-5の出版直前に出版された本書はまさに当を得たものと言えるだろう。

本書は医学生、研修医から専門家までの要求に堪えられる内容ではあるが、平易な理解しやすい文で書かれており、医療関係者や当事者・家族にも広く読まれることを期待したい。

(札幌医科大学教授・神経精神医学)

●B5 216頁 2013 定価: 本体5,800円+税
医学書院